

## 質のある保育を展開するには？

—— スウェーデンの保育者記録における日本の保育者養成への示唆 ——

How to create quality childcare:  
Suggestions from pedagogical documentation in Swedish preschools  
to educating Japanese childcare specialists

児童学科 浅野 由子  
Dept. of Child Studies Yoshiko Asano

**抄 録** スウェーデンの保育改革には、今後の日本の保育者養成について検討する課題が多く含まれている。そこで本研究では、スウェーデンの就学前学校におけるテーマ学習に着目し、筆者が保育を展開した記録をもとに、子どもたちの学びの様子を観察し、分析・考察することで、今後の乳幼児期における質のある保育を検討する意味で、必要な保育環境や実践内容や方法について分析・考察している。その結果、カリキュラムの重点項目 1) 算数 2) 自然科学と技術 3) 言葉 4) 創造性 5) 持続可能性の目標を具体的に設定し、保育活動を通して、子どもと保育者と保護者が、森林という循環のモデルとなる場を楽しみ、遊びを展開していた。更に、自然科学を主とした自然の知識を獲得し、環境倫理を持って、自然保護活動を展開していた。

**キーワード**：保育、質、テーマ学習、保育者養成、スウェーデン

**Abstract** In the Swedish early childhood revolution, there are many subjects which must be considered for future Japanese early childhood educator training. This study, has analyzed the necessary childcare environment, content, and methods in future early childhood education by analyzing children's learning (by playing) through theme learning ("Nature") activities that have been documented by a preschool teacher. In conclusion, there are specific targets in preschool, such as "mathematics", "natural science and technology", "language", "creativity", and "sustainability", which are the main topics in the national curriculum. Children, Early childhood educator and parents enjoyed and played in the forest which is the model place of the circulation. Furthermore, they got the knowledge and act for protecting nature with environment ethics.

**Keywords**: Childcare, Quality, Theme learning, Early childhood educator training, Sweden

### はじめに

現代社会は、地球温暖化による自然破壊の増加（グリーンランドの氷山接近、スウェーデンの山火事、日本の西日本豪雨等）やコロナ・ウイルスによる感染症の世界的拡大による人々の生活の変化で、市場経済や地域社会に悪影響が出ており、これまで以上に、地球の持続可能性（Sustainability）、つまり、環境、経済、社会のバランスについて、考慮し

て生きていかなければならない時代に突入した。<sup>1)</sup> 2015 年 9 月に国連により提唱された SDGs（Sustainable Development Goals、持続可能な開発目標）の 17 項目は、2030 年までに国連に加盟している各国がそのバランスを維持していく為に、必要不可欠な項目として今一度、注目すべきものである。<sup>2)</sup> 日本でも外務省を筆頭に、各省、各自治体や各機関において積極的に取り組まれている。また内閣府が提示した第 5 期科学技術基本計画では「Society 5.0」

を「サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会（Society）のこと」と定義し、それは、狩猟社会（Society1）、農耕社会（Society 2）、工業社会（Society3）、情報社会（Society4）に続くような新たな社会を生み出す変革を科学技術イノベーションが先導していく、という意味を持つとした。<sup>3)</sup>そして、今後の社会には「学びの変革」が必要であり、必要な能力として、「文章や情報を正確に読み解き対話する力」「科学的に思考・吟味し活用する力」「価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探求力」を挙げている。具体的には、学校がこれまでの一斉一律の授業のみならず、個人の進度や能力等に応じた学びの場となること、そして、同一学年集団の学習に加えて、異年齢・異学年集団での協働学習が拡大していくこと、が大切であるとしている。そこで特に、文部科学省では、2020年度には、ICT（Information, Communication and Technology）環境の充実を図ると共に、中央教育審議会（2018）で新しい時代の変化に対応する為に必要な能力として提唱された「アクティブ・ラーニング（主体的・対話的・深い学び）」を率先して取り組む課題としている。その目標は、学校教育における生徒や学生と「質の高い学び」を実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすること、つまり、受動的でなく、能動的な教育、社会に開かれた教育、生涯にわたる教育をキーワードとして、能力を育成することが求められている。<sup>4) 5)</sup>

今後、このような地球環境に生きる我々がどのように「アクティブ・ラーニング（主体的・対話的・深い学び）」をしていく必要があるだろうか？。その問題提起に答える国として、着目できるのが北欧スウェーデンである。スウェーデンでは、SDGsを2015年から、国・地方自治体・企業・学校の各機関で、率先的に進めて進めている。また今世紀から、ESD（Education for Sustainable Development, 持続可能な開発の為の教育）を、自然保護と民主主義を2本の柱として、国のレベルで保育・教育活動を行っている。<sup>6)</sup>スウェーデンの事例に着目することは、本研究の問題意識を追求する上で、必要不可欠であると仮説を立て、特に、筆者が保育者（スウェーデンの就学前学校教諭）として、数年間保育

活動に携わった経験から、人間形成の基本となる乳幼児期の活動を追跡することにより、「アクティブ・ラーニング」の基礎を築く為の環境について、追求し、今後の日本の保育者養成への示唆を得たい。

## スウェーデンの概要について

スウェーデンはスカンディナ비아半島に位置し、北欧4カ国（デンマーク、ノルウェー、フィンランド、スウェーデン）の1カ国として知られている。人口は約1千万人であり、国土は45万平方キロメートル（人口密度：22人/Km<sup>2</sup>）である。森林が国土の半分以上を占める、自然豊かな国である。消費税を25%支払う高福祉高負担の国として知られ、環境や教育にも力を入れている先進国といわれている。<sup>7)</sup>また就学前教育から民主主義教育が徹底しており、投票率の高い国（毎回80%以上の投票率）である。289のすべての自治体が「アジェンダ21」を制定しており、自然享受権（アレマンズレット）<sup>8)</sup>と呼ばれる、市民が自然を楽しむ権利と義務が定められており、公有地や私有地に関わらず、キノコや木の実を自由に摂って食べられる。リサイクル率の向上を目指していて、ペットボトルのデポジット制度等も進んでいる。さらに、自治体、企業、学校、各種団体の各機関でSDGsが普及している現状がある。福祉制度においては、育児・病気休暇が充実していて、保護者は計14ヶ月の育児休暇が保証されており、そのうち父親の育児休暇は3ヶ月与えられ、取得しないと消滅するシステムとなっている。<sup>9)</sup>男女平等においては、男女のジェンダーギャップ指数ランキング（世界経済フォーラム）において、世界4位（日本121位、2020年）<sup>10)</sup>で、毎年上位に位置している。社会保障制度が充実しており、子育てと老後が充実していることから、「胎内から天国まで」といった福祉国家として知られている。<sup>11)</sup>教育制度では、いつでもどこでも学習できる生涯学習の機会を保障し、基礎学校（就学前学級を含む、7歳から15歳）・高校・大学の無償化、障害者や移民を統合（インクルージョン）する保育と教育が行われている。教育の理念としては、1)人間の生活を尊重すること、2)個人の自由とプライバシーを保障すること、3)全ての人々が平等であること、4)男女平等、5)弱者と強者の団結が掲げられ、知識だけでなく、民主主義教育を徹底することが基礎となっている。<sup>12)</sup>

## 就学前学校の保育実践

スウェーデンの就学前学校の理念は、「民主主義的価値を育む生涯学習の最初の場として、楽しく安心して豊富な学習環境を提供すること」とされ、就学前学校の任務は、1) 保育 (Care) と教育 (Education) = EDUCARE (エデュケア) の両方を提供すること、次に 2) 母親の仕事(勉学)を保障することとされている。就学前学校が提供する保育・教育の基本的なものとして、1) EDUCARE, 2) 遊びを基本とした学習, 3) 子どもの視点と参加, 4) 新しい学習観による子どもの権利の尊重 (2020 年 1 月より法的拘束力を持つ) と記録 (教育学的ドキュメンテーション) の充実が挙げられる。<sup>13)</sup>

保育・教育環境も充実している。それは、室内の面積推奨基準が子ども 1 人当たり 6~7m<sup>2</sup>と決められているだけでなく、園庭の面積推奨基準として 1 人当たり 20~40m<sup>2</sup> (全体として 1,500~2,000m<sup>2</sup>) が設定されていることにも見える。(「就学前学校の質のための一般的なアドバイスとコメント」学校庁 2005 年) それと同時に、職員 1 人当たり平均 3~5 人 (1 歳~3 歳は、1~3 人) で、約 15 人の子どものグループに職員が最低 3 人配置されることも、保育の質に寄与している。<sup>14)</sup> 就学前学校教諭は大学で 3 年半の教員養成コースを修了した者、保育士は専科の高校や成人教育において保育や教育を学んだ者に資格が与えられる制度になっている。<sup>15)</sup> スウェーデンでは就学前学校から、テーマ学習を中心に、「学び」のあり方を、以下に定義している。「就学前学校は、学びを促すことが大切である。その為には、保育チームが知識と学びの概念の内容について積極的に議論することが前提となる。(中略) 子どもは遊びや他者との強調、探求と創造を通して、さらには観察したり、話し合ったり、反応したりすることで知識を獲得していく。テーマ活動によって、子どもの学びに多様性と相互の関連性をもらせることができる。」(Lpfö 2018)<sup>16)</sup>

## 研究目的

OECD (経済協力開発機構) の示す新しい社会に必要なキーコンピテンシー (2015) には、①自律的に行動する力②異質な人々の集団で関わる力③道具を相互作用的に用いる力が挙げられており、新しい時代に生きる為の幼児教育に質の変換が迫られて

いると言える。<sup>17)</sup> 日本社会では、新保育所保育指針「第 7 章 職員の資質向上」(2018)において、保育者の専門性を養護だけでなく教育にも力点をいれることや幼稚園教育要領 (2018)において、子育て支援や小学校との円滑な接続といった、保育者の専門性や保護者や地域社会との連携について強調されている。<sup>18) 19)</sup> こうした中で、現代の国際化や情報化といった新しい社会の変化に対応する乳幼児期の「アクティブ・ラーニング (主体的・対話的・深い学び)」のあり方を検討する際に、国際的な教育の動向にいつそう目を向ける必要がある、と指摘されている (無藤, 2018)<sup>20)</sup>。そこで、本研究では、保育者としてスウェーデンの就学前学校で勤務した経験から、日本の保育・教育環境を検討する際に、筆者が記録した保育を省察・評価した結果を、分析・考察することで、今後の日本の保育者養成への示唆を得ることを研究目的とする。

スウェーデンは、1998 年に、幼児教育施設が、就学前学校 (Förskola) という名前で、社会省から教育省への管轄で統一された。<sup>21)</sup> それに伴い、就学前学校における Läroplan (ナショナル・カリキュラム) の施行され、2011 年には、Läroplan (ナショナル・カリキュラム) が改訂され、乳児保育・幼児教育も「学校法」に組み込まれ、省レベルでの「幼保一元化」が実施された。日本では、2015 年に、待機児童が過去最高の 2 万 3167 人となったことから、「待機児童加速化プラン」や内閣府の「子ども・子育て支援新制度 (平成 27 年度)」が施行され、内閣府所轄の「認定こども園」が設立される等、「幼保一元化」への動きが見られる。しかし、幼保二元化体制が残っており、保育・教育制度の複雑性がいまだに残っていると言える。

スウェーデンでは「幼保一元化」により、「教育」機能が「養護」機能よりも優先されているという指摘もあったが、「教育」と「養護」の EDUCARE (エデュケア)、つまり「保育」という行為が「教育」と「養護」活動を合わせ持つという理念を持って、各現場が動いていると言える。

2011 年の改訂の際に強化されたのが、1) 子どもの言葉と会話能力の発達、数学的能力の発達、自然科学と技術の目標の拡大、2) カリキュラムの目標が達成できるようにチームとして責任を果たすこと、3) 「フォローアップ、評価、発展」の章が新設されたことである。<sup>22)</sup> 特に、その評価の方法と

して、「教育的ドキュメンテーション」をあげている。これは、イタリアのレヅジョ・エミリアアプローチの創始者で教育学者のローリス・マラグツィ (Malaguzzi, L.) の教育方法の影響を得ているものである。<sup>23)</sup> 白石 (2009) は、その記録について、「子どもたちのテーマ活動のプロセスを、保育者が子どもの言葉を書き留めたり、活動の様子を、写真に撮ったりして記録し、省察を添えて作成した文書のことです。」と説明している<sup>24)</sup> この記録を、スウェーデンの就学前学校では、「ドキュメンテーション・ボード」という記録を貼る掲示板のようなものが設定されているところが多く、子ども同士、子どもや保育者、保護者が、共に見られるようにしている。これは、保育をオープンに公開するという民主主義的な方法と言える。

更に、ナショナル・カリキュラム Läroplan (2011) には、家庭との連携を強化する為に、学期毎に親が集まる会 (Föräldrar möte) や、子どもの発達面接 (Utveckling samtal) を義務化するよう記述されている。この結果、保護者もより、保育活動に参加し、その活動に影響を与え、共に日々の保育活動を展開出来ることになった、と言える。保護者との連携や地域社会との連携を考える上でも、この施策から日本社会が学ぶことも多い。その後のナショナルカリキュラム (2016) の改訂では、「データ化とプログラミングの強化」が盛り込まれ、ICT 環境の強化も図られることになった。<sup>25)</sup> 日本では、コロナ禍という状況も重なり、今後、ICT による子どもと保護者との連携は欠かせない課題となるであろう。このようにスウェーデンの保育改革には、今後の日本の保育や教育における「アクティブ・ラーニング」について検討する課題が多く含まれている。そこで本研究では、スウェーデンの就学前学校におけるテーマ学習に着目し、筆者が保育を展開した記録をもとに、子どもたちの遊びを通した学びの様子を観察し、分析・考察することで、今後の乳幼児期における質のある保育を検討する意味で、必要な保育環境や実践の内容や方法について分析・考察する。

## 研究方法

エスノグラフィ調査 (参与観察、インタビュー調査、ビデオや音声が必要に応じて撮る。)

研究対象 スウェーデン王国ウプサラ市私立 M 就学前学校 年中 (3~4 歳) グループ 5 名

研究期間 2016 年 8 月 (秋学期) ~2017 年 6 月 (春学期)

テーマ学習「自然 (Natur)」を中心に、筆者が、就学前学校において保育者として保育に携わった経験と記録を省察し、分析・考察する。

## 研究結果

### テーマ学習の選定

秋学期初めの教職員の計画会議 (Planering dag) で、すべての教職員が取り上げたいテーマの選択肢をあげて、そのテーマの候補から、多数決によりテーマを決定する。テーマを列挙する際に重要なのは、子どもの日頃の興味・関心を考慮してあげることである。テーマが決定した後は、何故そのテーマを取り上げるのかという目的 (Why, 何の為に?) や対象を何にするのか? (What, 何を?) そして、手法 (How, どのように?) 実施するのか? 最後に、場所 (Where, 何処で?) 実施するのかについて、議論して合意形成を行なった。また 2ヶ月毎に、スウェーデンの就学前学校のナショナル・カリキュラムの 2 項目にある「目標とガイドライン」の中の「成長と学び」の目標とガイドラインに沿った保育活動を計画する。特に、カリキュラムの 2 項目の「成長と学び」の中にある目標の中でも、特に重要な分野である、1) 算数、2) 自然科学・技術、3) 言葉、4) 創造性、5) 持続可能性、6) 健康、を重視し、子どもの興味・関心に合わせて、活動内容を数ヶ月毎に集中して行うエポック (ある特色に彩られた) 方式を採用している。

何故 (WHY) —自然への興味、感性を育み、知識を得ることを促し、人間としての権利と義務を理解する為

何を (WHAT) —人間の身体、動植物、  
どのように (HOW) —図鑑、絵本、iPad、カード、クイズ、絵画、栽培、

何処で (WHERE) —森林、就学前学校、

### 1) 算数 (10 月, 11 月, 12 月)

**保育活動** グループ (年齢毎) で行うテーマ学習は、週 2 回 (火曜日、木曜日) の 1 時間半である。自然への興味や感性そして知識を得られることも目的に、森林に向かう道や森林にて、自然に関する絵本の読み聞かせや植物や動物との関わりと知識を得られるような援助を行った。教材として、自然学校

から配布されている「LEKA OCH LÄRA MATEMATIK UTE 野外で算数を遊んで学ぼう！」という教本(図1)を使用し、動植物の興味関心を促し、知識を自然に身につけられる工夫をした。<sup>26)</sup>



図1 NATURE TEXT

例) 大きな葉っぱを見つけよう  
 小さな葉っぱを見つけよう  
 高い木を見つけよう  
 低い木を見つけよう  
 何か硬いものを見つけよう  
 何か柔らかいものを見つけよう

### ナショナル・カリキュラム (Lpfö 2018)

- ・空間、形、場所と方向性、量や位置、順序や数の概念、話し言葉の概念、そして計測、時間、変化についての基本的な資質を育てる。
- ・自分や他者から提起された問題を、数字を使って、調べたり、いろいろな解決策を試したりする能力を育てる。
- ・数学的な概念を使ったり、識別したり、表現し、調べたりする能力、またそれに関連する能力を育てる。
- ・論理に従って、考えを進める数学的な思考を深める

### 2) 言葉 (1月, 2月)

**保育活動** 森林で、自然に関するメモリーカード (LEKA MED MAJA)<sup>27)</sup>をし、遊びの中で、動植物の名前を覚える。子ども達に、動植物に関するクイズを何題か出しながら、子どもから出された答えを討議しながら、当てはまる動植物について考える。



写真1 QUESTION MOMENT

(写真1)

### ナショナル・カリキュラム (Lpfö 2018)

- ・話し言葉、語彙、概念を発達させ、言葉遊びをしたり、事物に関わったり、考えを表現したり、質問したり、他者と話し合ったり、会話する能力を育てる。

- ・書き言葉への関心やシンボルを理解する能力を育て、それらのコミュニケーション上の機能を理解する。

### 3) 自然科学と技術 (3月, 4月)

**保育活動** 森林に向かう途中の道である子どもが発見した「かたつむり」について、グループでその生態について討議する。角が何本あるのか、目はどこにあるのか、何処に家があるのか等を、子ども達と保育者が話し合う。最終的に、子どもの一人が踏んづけてしまったことを、責める場面で会話が終わり、動植物を労わることを共感する場面があった。森林で、蟻地獄を作っていた蟻や、園庭に落ちてきたと思われる鳥の卵の殻が、どの種類の鳥の卵かを図鑑や iPad で検索しながら、話し合う。さらに、



写真2 NATURE MATERIAL

様々な鳥の鳴き声を、鳥の鳴き声と鳥の種類を結びつけて学べる教材絵本 (写真2)<sup>28)</sup>で学び、春先から鳥が巣籠もり出来る鳥小屋を、技術のある保育者と共に、組み立てる大作業をする。

### ナショナル・カリキュラム (Lpfö 2018)

- ・自然についての科学や関係性の理解を育て、また植物、動物、簡単な化学的過程や物理的現象の知識を培う。
- ・自然科学について、問題を提起して話し合ったり、識別、調査したり、言語化する能力を育てる。
- ・いろいろな材料や道具、技術を用いて、組み立て、創造し、構成する能力を発達させる。

### 4) 持続可能性 (4月, 5月)

**保育活動** NGO「HÅLL SVERIGE RENT (スウェーデンを綺麗に)」<sup>29)</sup>との連携で、ほとんどのスウェーデンの就学前前学校が参加している行事がある。それは、春を迎える頃(3月下旬-4月上旬)に、地域にあるゴミ拾いを行うというものである。袋が配られ、活動に参加



写真3 CLEANING ACTIVITY

したことへの証明書がもらえる。団体（NGO）からは、ゴミ拾いに関する教材（スゴロク）や鉛筆等が授与される。就学前学校では、すべての子どもが就学前学校で出てくるゴミや森林や近隣のゴミを自主的に回収し、分別して近所のリサイクルセンターでゴミ出しをする。（写真3）

#### ナショナル・カリキュラム（Lpfö 2018）

・異なる自然の循環へ興味を持ち、理解し、また、人間が、どのように自然と社会と相互作用するかを理解すること（Lpfö 2018）

#### 5) 創造性（5月、6月）

**活動内容** 日頃活動をしている森林や春に咲く野の花を採集し、観察し、子ども一人一人が、水彩絵の具を使用し思い思いの表現をする。その後、簡単な植物（ひまわり）を育てる。（写真4）

#### ナショナル・カリキュラム（Lpfö 2018）

・創造力を高めるとともに、自分の考え、経験を、遊びや絵、歌や音楽、ダンスやドラマなどさまざまな表現方法を伝える能力を育てる。

#### 分析・考察

テーマ学習「自然」に保育者として、保育活動に携わりながら、研究テーマ「このような地球環境に

生きる我々がどのように「アクティブ・ラーニング（主体的・対話的・深い学び）」をしていく必要があるだろうか？」を追求し、分析・考察をしてみた。

まず、テーマの選択方法であるが、子どもの興味・関心を主として、すべての保育者の意見を尊重しながら、最終的にはテーマを多数決で決定したが、その方法は、民主主義的である。園長からの独断でテーマを決めるといったトップ・ダウンの方法がとられていない点や子どもだけでなく、保育者時には俸護者も参加し主体的・対話的・深い学びによりテーマが決定されることは、興味深い視点である。

次に、ナショナル・カリキュラムと保育活動との関係性であるが、カリキュラムの2項目の「成長と学び」の中にある目標の中でも、特に重要な分野、

1) 算数、2) 自然科学・技術、3) 言葉、4) 創造性、5) 持続可能性、6) 健康、を重視し、子どもの興味・関心に合わせて、活動内容を数ヶ月毎に集中して行うエポック（ある特色に彩られた）方式である。2011年より、幼児教育が「学校法」に位置付けられたことにより、改訂されたナショナル・カリキュラムには、新たに、1) 算数、2) 自然科学・技術、3) 言葉の項目が追加されて強化されたが、その影響もあってか、NGOから配布された様々な教材や道具を活用しながら、「遊び」を基本に、子ども達の「アクティブ・ラーニング」を援



写真4 CLEATIVITY ACTIVITY

助する活動が観察された。例えば、自然科学の知識を得るのに、形（視覚）だけでなく音（聴覚）と同時に興味を持たせる鳥に関する教材、数に親しみを持てるように森林活動での体験（触覚）を基本に、課題を盛り入れた教材が使用されている。更に、5）持続可能性を理解する為に、人間が排出する廃棄物をどのように扱うか、例えば、森林で食べたフルーツ（りんごや梨）は、コンポストにして土壌に埋めること、フルーツを味わう（味覚・嗅覚）ことによって学び、その他に出た廃棄物（プラスチックやガラス）は、リサイクルセンターに持参するといったことを、体験（五感）を通して学んでいた。筆者が提唱した持続可能な開発の為の教育（ESD）に必要な5つの視点の環境認識論的モデル（浅野，2009）<sup>30)</sup>では、ESDの実現には、環境教育で重要視されてきた①体験（感性）、③科学（知識）⑤行動（実践）の他に、②（持続可能性の）モデルと④集団倫理（環境倫理）が、必要不可欠であることを指摘した。

この就学前学校では、カリキュラムの重点項目1）2）3）4）5）の目標を具体的に設定し保育活動を通して、子どもと保育者と保護者が、自然（森林）体験①を主に、森林という循環のモデル②となる場での遊びを通して、自然科学を主とした必要な知識③を獲得し、最終的には、子どもと保育者と保護者共に④自然や社会への行動に移す⑤までの視点を持って、保育活動を展開していたと考えられる。

最後に、4）創造性に関する活動であるが、スウェーデンのナショナル・カリキュラムの背景には、「子どもたちの100の言葉」<sup>22)</sup>をはじめに、子どもの芸術教育や地域教育を提唱する「レッジョ・エミリア」の思想が反映されていることもあり、各就学前学校には「アトリエ」で、子どもが自由に表現する場（人・もの・空間）が保障されていたことは、興味深い。レッジョ・エミリアには、ペダゴジスタ（教育専門家）やアトリエスタ（芸術専門家）という専門家を配置するという人的環境も整っており、スウェーデンの就学前施設では、専門家を配置しているところもある。また通常、保育者が記録している「教育的ドキュメンテーション」は、レッジョ・エミリアの思想の影響が大きいですが、子ども1人1人の個人記録を取ることは、保育者にとって習慣としてあり、子どもと保護者もその記録を保育者と共に作り上げていくのは、民主主義的な方法と

なっていると言ってよいだろう。そのレッジョ・エミリアの子ども観について、浅井（2020）は、『「100の言葉」というアイデア、すなわち話し言葉や書き言葉だけでなく、絵画、粘土、身振り、表現、音楽として捉えることによって、具体化されている。そして、その言葉に大人が耳を傾けることは、写真や絵画やビデオなどの多様な媒体を用いた多層的な記録のツール「ドキュメンテーション」によって支えられている。これらのアイデアやツールは、子どもの想像力や創造性を育むもの、子どもの学びを可視化するものとして着目されてきたが、子どもの権利を保障するという点でも、幼児教育に重要な示唆を与えてくれる。』と述べ、大人が子どもの声を言葉以外のものにも耳を傾けることの重要性を指摘する。<sup>31)</sup>最近では、その記録を保育者と子どもが、iPadや携帯電話のアプリケーションで作成し、即その記録に保育者や保護者が参加出来るということも、ICT環境の充実が図られている証拠である。このようなカリキュラムや教材そして保育者養成は、日本の保育者の専門性として必要とされている発達と学びや家庭と地域の連続性を検討する意味で参考になる。

グニラ・ダールベリー（2007）は、「学び」というのが、「聞くこと」であり、「出会い」であることを指摘した上で、幼児教育施設の意義について、「幼児教育施設は、子どもと大人の出会いの場であり、そうした活動である『Minor Politics（少数政治）』が、グローバルな問題である、不平等、貧困、環境問題改善の為に幼児教育施設の役割である」ことを指摘している。<sup>32)</sup>就学前学校での「学び」は、自然保護や民主主義を促進する上で「出会い」を提供し、この地球環境に生きる我々に必要な居場所（場と時間）となっていると考えられる。

## まとめ

本研究で対象とした就学前学校施設における保育では、テーマ学習に関わらず、日常の保育において、2030年に向けて到達すべきSDGsのすべての項目に関連する実践が行われている。<sup>33)</sup>テーマ学習の「自然」に関する保育は、乳幼児期から自然体験を中心に、遊びを通して学び、人間が、自然や社会に関する知識を得、自然や社会の為に具体的な行動を起こしていく為に、必要不可欠な活動といえる。

2004年～2015年のDESD（持続可能な開発の為の

教育の 10 年)は、日本政府が主体となって始めた国際的な教育活動であったが、その後の目標として、2016 年からの 3 年間、GAP (グローバル・アクション・プログラム)が目標として制定された。それは、①政策的支援②教師教育③持続可能性への包括的アプローチ④若者(ユース)の参加⑤地域活動の奨励といった具体的な重点化課題もあげられた。

<sup>34)</sup> 今後は、ESD 2030 をはじめ子どもや若者、地域社会が地球の未来を試行錯誤して積極的に行動していくことが益々要求される。その芽を、自然体験を通じて、乳幼児期から育てていくことは、我々人類にとって急務であり、それこそが、「アクティブ・ラーニング」の基礎と考えられる。今後のめまぐるしく変化する新しい社会に適応する子どもを育てる保育者の専門性として、その芽を育てる為、「思考共有支援」(SST:sustained shared thinking, Siraj-Blatchford, 2007)、保育者が子どもたちの考えやアイデアをつなぎ、課題解決に向けた方法や技術を協働で見つけ出す、といった力量も要求されることであろう。<sup>35)</sup>

## 謝辞

本研究は、2017 年 11 月 25 日(土)日本女子大学家政学部児童学科プサラ大学教育学部(スウェーデン)協定校締結保育士養成課程設置記念講演会「スウェーデンの保育・教育改革から学ぶ」における発表及び 2018 年 8 月 4 日(土)児童学科縦の会主催講演会「質のある『学力』を育てるには?—スウェーデンの保育・教育実践を通して—」における講演内容を論文にしたものである。また、科学研究費基盤研究(C)「グローバルとローカルの持続可能性を融合する GAP のモデル開発」(18K02549)の助成を受けたものでもある。

## 参考文献

- 1) 国連ブルントラント委員会報告書(1987)「Our Common Future (放題:我ら共有の未来)」
- 2) SDGs 国際連合持続可能な開発目標ホームページ <https://www.un.org/sustainabledevelopment/>
- 3) 内閣府(2018)第 5 期科学技術基本計画 概要
- 4) 文部科学省(2018)「Society 5.0 に向けた人材育成～社会が変わる, 学びが変わる～(概要)」p1
- 5) 文部科学省(2017)「新しい学習指導要領の考え方—中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ—」p12
- 6) Klaar, Susanne & Öhman, Johan. 2012 Children's meaning making of nature in an outdoor-oriented and democratic Swedish preschool practice. *Accepte- rad för publicering I European Early Childhood Education Research Journal.*
- 7) 神谷直彦(2010)「分かち合い」の経済学(岩波新書)
- 8) 石渡利康(1995)「北欧の自然環境享受権」(北欧双方書)
- 9) Stanfors, Maria. (2007) "Mellan arbete och familj. Ett dilemma för kvinnor i 1900-talets Sverige. SNS, Förlag." Tabell 6.1
- 10) 世界経済フォーラム(2019) Mind the 100 Year Gap
- 11) 岡沢憲美(2004)スウェーデンハンドブック, 早稲田大学出版部
- 12) Skolverket(教育省)ホームページ(www.skolverket.se)
- 13) 白石淑江(2009)スウェーデン保育から幼児教育へ—就学前学校の実践と新しい保育制度
- 14) 社会法人全国社会福祉協議会(2009)「3. 諸外国の保育環境に関する文献調査」『「機能面に着目した保育所の環境・空間に係る研究事業」総合報告書』pp476-483
- 15) Skolverket(教育省)ホームページ(www.skolverket.se)
- 16) Skolverket(2018) Läroplan för förskolan (Lpfö 2018)
- 17) OECD(2015) "Definition and Selection of Competencies (DeSeCo)
- 18) 保育所保育指針(2018)
- 19) 幼稚園教育要領(2018)
- 20) 無藤隆(2018)「領域 環境」p.212
- 21) Skolverket(1998) Läroplan för förskolan (Lpfö 1998)
- 22) Skolverket(2011) Läroplan för förskolan (Lpfö 2001)
- 23) レッジョチルドレン(2001)『イタリア/レッジョ・エミリア市の幼児教育実践記録 子どもたちの 100 の言葉』学研



- 24) 白石淑江 (2009) スウェーデン保育から幼児教育へ—就学前学校の実践と新しい保育制度
- 25) Skolverket (2016) Läroplan för förskolan (Lpfö 16)
- 26) Naturföreningen (2011) Hemlig påse, Exempel: Leka och lära matematik ute p.10
- 27) Naturkul (2019) Majas Naturmemo, Hjelm Förlag AB
- 28) Andrea Pinnington, Caz Buckingham (2007) “BARNENS FÅGELBOK”
- 29) NGO「HÅLL SVERIGE RENT (スウェーデンを綺麗に)」ホームページ <https://www.hsr.se>
- 30) 浅野由子 (2009) 「日本とスウェーデンの「持続可能な社会」を目指す幼児期の「環境教育」の意義 —〈5つの視点の環境認識論的モデル〉を通して—」
- 31) 浅井幸子 (2020) 「子どもの権利条約における子どもの見方」日本保育学会会報 第 176 号 p3-4
- 32) Dahlberg, G (2006) “A Pedagogy of Welcoming and Hospitality built on Listening: An Ethical and Political Perspective on Early Childhood Education”. The 4th KSRCE International Conference In Collaboration With OMEP. pp 63-87.
- 33) 浅野由子 研究の動向「スウェーデンにおける幼児期の SDGs 実践 —就学前学校の保育・教育活動から—」日本家政学会誌 Vol.71 No.6 1~5 2020年6月
- 34) 文部科学省, 日本ユネスコ国内委員会 (2018) 「ユネスコスクールで目指す SDGs」
- 35) Siraj-Blatchford, I. (2007). Creativity, communication and collaboration: The identification of pedagogic progression in sustained shared thinking. *Asia-Pacific Journal of Research in Early Childhood Education*, 1 3-23

